

病虫害の発生概況

〔害虫発生概況〕

1～2月に厳しい寒さが入り局部的被害もみられたが3月以降おおむね順調に推移し、9月台風18号、10月下旬台風24号が接近したが大被害を蒙らず経過した。このため病害発生も少なく、高温多照年に多発生するイネもみ枯細菌病、ムギ斑葉病、ヤサイ類のうどんこ病などが目立ったのみで、ほぼ平穩に終始した。なおタマネギびわ玉症（萎黄病）の新発生があった。

稲・麦

早期水稲（長崎）、早植（大分）、普通期（宮崎）に葉いもちが発生し、一部ざりこみを生じたが、その後回復し少発生にとどまった。穂いもちが佐賀県の一部で多発生し減収の一因となり、いもち病防除体系の再検討など問題提起がなされた。イネもみ枯細菌病が大分を除く各地で多発生となり九州地域計 3.7万haの発生面積（過去12年間のうち第4位）となったが、発生程度は全般に軽く経過した。宮崎・鹿児島早期水稲を主体とした内類褐変症（*Erwinia* 属細菌による新病害）が多発生し、発生穀の品質低下と減収を招くことから、今後の防除対策が問題とされた。その他黄化萎縮病、褐色葉枯病が長崎の一部で多発生、紋枯病が鹿児島で多発生となった。大分、長崎対馬でグラシースタント病が初発し、黄萎病が長崎でやや多発生したほかは全般にウイルス病発生が少なく、ほとんど問題とされなかった。その他稲病害の多くは全般に少発生にとどまった。二条大麦を主体とした縞萎縮病が北部九州で増加傾向にあり、発生面積率 2.6%（前年比 0.2%増）となり大分・鹿児島にも初発生がみられた。発生面積は増加しているが、耕種防除法の指導によって被害程度は全般的に低下している。斑葉病が各地で多発生し、種子消毒の徹底が要望された。赤かび病が佐賀で多発生し、九州7県の発生面積率が約43%となり、過去3カ年中最高であったが、出穂以降の好天に恵まれ発生程度は全般的に低く経過した。うどんこ病が佐賀・鹿児島でやや多発生～多発生、株腐病が宮崎で発生面積率39%に増加し問題とされているほか、網斑病、雲形病が鹿児島で発生した。さび病類は全般に少発生であったが、アサカゼコムギ、シロワセコムギの発生が目立ったが発生程度は軽く被害は少ないとみられた。福岡で小麦の登熟期頃、急激に枯死する枯れ熟れ症状が各地で発生したが、その原因は明らかにされていない。

転作作物

ダイズ紫斑病は播種時の天候に恵まれ、それ以降も発生が少なくごく少発生にとどまった。葉焼病は福岡で9月中旬以降やや発生がみられた程度で各地とも少発生で

あった。べと病は8月以降各地で多発生したが、その後停滞し、大分で排水不良田で一部多発生となったほかは全般に小～中発生にとどまった。モザイク病は宮崎で少発生したほかはごく少発生であった。福岡で白絹病が一部多発生したほか、農試圃場の早播きのフクユタカ、アキシロメにさび病が激発した例がみられた。最近作付が増加しているハトムギ葉枯病が鹿児島で多発生、佐賀で一部多発生となり被害が著しかった。作付の最も多い福岡の発生状況は明らかでない。

野菜

ヤサイ類のうどんこ病が全般的に発生し、ナス（佐賀）キュウリ（長崎、宮崎、鹿児島）、イチゴ（佐賀、大分）、エンドウ（鹿児島）などに多発生となった。イチゴ灰色かび病は長崎、熊本がやや多発、レタス灰色かび病は大分が多発、キュウリ、メロン、ネギのべと病は長崎、鹿児島が多発、トマト、ピーマン、メロン、イチゴ疫病は鹿児島、宮崎、佐賀がやや多発、ナス核病（大分）、メロンつる枯病（熊本）、ハクサイ白斑病（大分）、キュウリつる割病（大分）、イチゴ炭そ病（佐賀）、ネギさび病・黒斑病（大分）などがやや多発～多発生であった。キュウリ褐斑病が大分で発生が急増し問題となっている。斑点細菌病・かいよう病・青枯病・褐斑細菌病などの細菌性病害がトマト、ナス、キュウリ、ピーマン、メロン、パレイショ、レタスなどに発生したが発生程度はやや多発生にとどまった所が多い。パレイショそうか病は長崎でやや多発生、黒あざ病は1～2月のトンネル栽培で一部多発生となった。ダイコン亀裂萎縮病が長崎で初めてみられ、一部多発生した。ウイルス病は全般に発生が少なく、大分でピーマンモザイク病に一部 TMV-P 系による被害が増加し、宮崎では TMV-U トラガラシ系による発生増加がみられた。このほかダイコンモザイク病が大分で、トマトモザイク病が熊本でやや多発生した。タマネギびわ玉症（萎黄病）が佐賀でやや多発生し、MLOによる新病害であり今後の発生動向が懸念されている。サツマイモ根部異常症が鹿児島で多発し問題とされているほか、かいよう病が宮崎・鹿児島で多発し、黒あざ病が長崎で一部多発生となった。シュンギクべと病は大分・鹿児島で新たに発生が確認された。福岡でカボチャ台接木キュウリおよびユウガオ台接木スイカに急性萎凋症が発生し問題とされている。

果樹・茶・特用作物

カンキツ黒点病が福岡で多発生、大分・宮崎でやや多発生、そうか病は熊本でやや多発生、小黒点病が宮崎で

やや多発生、灰色かび病が熊本で多発生となった。ナシ黒星病が福岡で多発生、黒斑病は大分でやや多発生となったが、ペノミル剤耐性菌の発生増加が問題とされた。ナシ胴枯病が熊本で、ブドウ胴枯病が大分でやや多発生となった。ブドウつる割病が品種巨峰を主体に熊本でやや多発生し漸増傾向がみられる。そのほかの病害は全般に少発生でほとんど被害はみられなかった。クリ実炭そ病が大分・宮崎で多発生～やや多発生であった。ピワがんしゅ病が長崎で多発生となった。茶もち病が熊本で多発生となったほかは他病害はすべて少発生にとどまった。バナナ萎凋病が沖縄北部でやや多発生し、サトウキビさび病もやや多発生した。サトウキビ黒穂病・葉焼病が鹿児島で多発生となり、黒穂病の多発は罹病株抜き取りが不十分であったことが原因とみられている。

(病害発生概況)

水稲や果樹での害虫の発生は概して平穩であったが、野菜を被害する新発生害虫「ミナミキイロアザミウマ」一新称は、分布範囲を拡大して九州全域に及び、しかも被害は激甚で、産地存亡の危機となっているところもある。

水稲・いぐさ・麦

水稲ではセジロウンカ及びトビイロウンカの初飛来は5月上・中旬で早かったが、主な飛来は6月第6半句であった。中部以北ではセジロウンカの飛来量が多く、次世代の8月中旬まで多発した。とくに、長崎県対馬ではセジロウンカの異常多飛来があり、6月29日予察灯に、49,000頭、6月第6半句の総誘殺虫数は66,000頭で、株当たり80~100頭生息したが、防除が徹底したので被害は少なかった。トビイロウンカ及びウンカ類とほぼ同時に飛来したコブノメイガは、いずれも飛来量が少な目で稲作期間中少発生に終わった。ツマグロヨコバイは8月中・下旬以降の第3回、4回成虫が各地で多発生、一部ではすす病も発生した。これは7~8月の高温乾燥状態の天候が増殖に好適したためと考えられる。南九州では早期稲にイネアザミウマが多発した。近年このような事例はなく発生原因は明らかでない。発生時期は早期稲の移植後から5月上旬ころまでで、宮崎県の発生面積は200haであった。大分・福岡両県にまたがる高標高地帯で、昨年に続きイネドロオイムシが発生し、発生面積が拡大し(67ha)、被害程度も高くなった。なお、他地域では局部的にニカメイチュウが多発しているところもあるが、九州地

1981年 水稲主要病害虫の発生状況(発生面積ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎*	鹿児島*	沖縄*	
(病害)									
葉いもち	9,370	5,226	9,000	16,746	25,450	11,019	18,860	213	
穂・枝梗いもち	19,101	7,839	3,500	11,164	26,190	10,947	5,738	35	
紋枯病	24,427	4,641	3,000	30,700	30,960	27,888	34,029	213	
白葉枯病	3,477	1,833	600	8,373	5,670	4,579	1	143	
穂枯細菌病	15,462	2,496	—	4,000	550	565	11,280	—	
縞葉枯病	3,703	—	700	83	900	56	1,080	0	
萎縮病	16,188	—	10,000	12,280	10,600	10,039	15,882	0	
黄萎病	0	—	200	0	0	2,652	269	61	
ごま葉枯病	8,828	9,633	6,000	2,000	9,450	13,250	15,883	172	
小粒菌核病	—	0	—	2,500	4,500	—	5,730	—	
心枯線虫病	32	—	2,500	1,000	2,080	670	7,389	6	
(虫害)									
ニカメイチュウ(第1世代)	102	0	80	—	2,360	259	29	} 2	
(第2世代)	82	0	50	—	1,400	921	41		
セジロウンカ	45,394	20,046	22,500	24,500	24,250	10,875	18,226	96	
トビイロウンカ	38,493	15,990	21,750	28,500	15,600	17,153	25,436	88	
ヒメトビウンカ	24,906	78	5,000	6,500	5,300	20,888	14,629	34	
ツマグロヨコバイ	54,614	29,406	18,000	31,300	31,200	30,300	34,752	472	
イネツトムシ	—	624	500	4,700	5,500	3,250	5,273	0	
コブノメイガ	49,490	9,087	19,000	27,500	25,300	16,392	26,696	155	
フタオビコヤガ	—	—	100	150	3,400	415	901	0	
アワヨトウ	1,401	—	1,000	1,000	70	582	60	1	
イネゾウムシ	1,455	—	1,000	4,500	4,000	508	1,196	—	
カメムシ類	1,623	—	10,000	5,500	2,200	7,146	2,209	36	

*早期、一期・二期作を含む。

域ではそのような徴候はまだみられていない。

いぐさではイグサシムシガは福岡では少なかったが、熊本ではやや多目の発生であった。麦類ではトビムシモドキの発生は全般的に少な目であったが、遅播きすると発芽に要する期間が長くなり、それだけ加害期間も長くなって被害が大きくなり、大豆跡の遅播き田では一部で被害が発生した。

転作作物

大豆では1978年に次ぎハスモンヨトウが発生した。8月中旬以降増加し、適期に防除された場合には被害は軽微であり、防除の有無の良否による発生の差が顕著にみられた。飼料作物では生育初期にアブラムシ類が多目で、またアワヨトウが6月及び8月に局部的に多く、飼料作物を食いつくして稲へ移行したケースもあった。

野菜・畑作物

ミナミキイロアザミウマは沖縄を含む全地域へ分布し、果菜類を中心に甚大な被害を及ぼしている。寄主範囲は雑草も含み多種に及ぶが、野菜で寄生密度が高いのは、キュウリ、スイカ、メロン、カボチャ、ナス、ジャガイモ、ピーマン、インゲンなどで、夏期には露地でも発生する。各県では対策協議会を組織して対処しているが、適確な防除剤がないこともあって、防除対策に苦慮している。侵入害虫であるオンシツコナジラミも各地で定着し、施設を中心としたトマト、キュウリ、ナスなどに被害が発生している。

以上のほか、野菜で全般的に多目であったのは、春から初夏にかけてアブラムシ類とハダニ類、コナガ（キャベツ）、キスジノミハムシ（ダイコン）、ネギアザミウマ、ネギコガ（ネギ）などであった。また、キノコバエ類が

ハウスに多発し、一部では幼虫による食害（キュウリ）もみられている。

畑作物ではサツマイモにナカジロシタバが7月に多発、イモコガ、ハスモンヨトウも多目、鹿児島県西之表ではクロトビメクラカメムシが8～9月に多かった。サトウキビではメイチュウ類やバクバク類（特にセスジツチイナゴ）が多発した。かんばつの影響があったものと思われる。

果樹・茶

各地で春期にミカンハダニやミカンサビダニが多かった。これは2月末の異常寒波で樹が衰弱し、そのため休眠期にマシン油乳剤を散布できなかった園が多かったことが原因と考えられる。また、春先には各樹種の新梢にアブラムシ類も多目であった。ヤノネカイガラムシは各世代とも少～並の発生であったが、沖縄で初めて発生が確認された（名護市1981. 11. 1）。

放任園や管理不良園の増加に伴い、近年カミキリムシ類が各地で増加傾向である。ミカンではチャノキイロアザミウマ、ミカンハモグリガなどが多目であった。クリでは近年各地でクリタマバチが増加しており、有効な薬剤がなく対策に苦慮している現状である。本年、カメムシ類の発生は各樹種とも少なかった。ミカンコミバエは沖縄本島とその周辺離島において誘殺剤による防除が実施され、その結果6月以降トラップや果実分解調査での発生は確認されておらず、根絶宣言が待たれている。

茶では、コカクモンハマキ（第1～3世代）、チャノキイロアザミウマ（夏～秋）、カンザワハダニ（一番茶期～二番茶期）、チャノミドリヒメヨコバイ、クワシロカイガラムシ（第2～3世代）などが多目であった。

（九州農業試験場 環境第一部）